
俺、元ヒーローっす。

仙崎 龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺、元ヒーローっす。

【Nコード】

N4844T

【作者名】

仙崎 龍牙

【あらすじ】

これはあったかもしれない未来

ヒーローはアイドルのように毎日お茶の間をにぎやかす存在になっていた

数年前、突然現れた人間を改造して作られた通称怪人を率いて世界征服を狙う数多くの悪の組織が突然現れた

各企業はそれに対抗して、強化服 通称スーツなどの武器を開発した
それをまとって戦うものをヒーローと呼んだ

これはそんな時代の一人の元ヒーローの物語

プロローグ

「キミ、今日でクビね」

朝一番にハゲの上司から突然告げられた言葉。これで15回目のクビ。うち一回は自主退職だから実質14回目か――などというどうでもいいことが頭をよぎる

俺が反論をしようとしたら上司が俺の顔の前に人差し指を立ててこういった。

「文句も言い訳も聞きたくないからさっさと荷物まとめてくれないかなあ。ああ、これは退職金ね。今月分の給料と一緒にしておたから。そのダンボールの中はキミの私物ね」

そういつて俺にダンボールを投げつけ、机に薄っぺらい封筒を置いた

俺は封筒とダンボールを持ち、会社を後にした

無力な英雄（ヒーロー）

ダンボールを片手に通勤、通学ラッシュでにぎわっている大通りをフラフラと歩く

（次の仕事、どっかに転がってねえかな・・・）と思いながら公園のベンチにドカッと座り込む。目の前には迎えのバスを待っている幼稚園児がじゃれあっている。後ろのとおりには会社には遅れないように早足で歩いているサラリーマン

「俺、なにやってるんだろ・・・」

無意識のうちに昔、ヒーローのときに使っていた腕時計型変身道具ウォッチをいじっていた。

「なあ！ 昨日のアレ！ みたか!？」

「みたみた！ レインボーレンジャーだろ!？ かっこよかったなあ！」

子供同士の無邪気な声が耳に届く。

（俺みたいな人間になるなよ）

心の中でつぶやいてベンチから立ち上がろうとしたと同時に後ろからビルが崩れる音がした。

そしてあちらこちらから悲鳴や血の匂い。

「誰か助けてくれ！ 悪の組織が攻めてきた！」

誰かが叫ぶ その声も悲鳴にかき消されていった

「誰か！ 誰かああ！」

「わああああああああ！」

俺の前をどんどん人が走り去っていく。

（俺もにげねえとな）

俺はダンボールをインドの人のように頭に乗つけて器用に人ごみを避けて走っていく。

逃げる集団の最前列を走っていく俺が目にしたもの それは絶対に思い出したくない光景だった。

人がカラスについはまれたゴミ袋のようにバラバラにされて転がっている そしてまだ形が残っている死体にたかって食らっている複数の黒い人型の化け物 悪の組織の一つ、プレデターの戦闘員であった。

俺は路地裏に逃げようとした。

「お母さん どこ？」

と言う子供の声を聞いて足を止めた。

（あーあ また俺の悪い癖が出ちゃったな）

俺はダンボールを投げ捨て走り出す。そして数秒後、背中に痛みが走った。

（俺、ヒーロー辞めたはずなのに何やってるんだろ・・・）

俺は心の中でぼやいた

俺は無意識のうちに目の前の子供を抱きしめて守っていた。

「坊主、悪いやつ倒したらすぐにお母さんを探してやる。それまであっちに隠れてろ。すぐにヒーローが助けに来てくれるぞ」

俺は満面の笑みで子供に話しかける。子供は素直に従い、俺の後ろの路地に逃げ、顔を少しだけ覗かせていた

「少しだけ、お仕事させてもらいますかな」

俺はウォッチの出っ張りを押し、右手を前に突き出した。

英雄（ヒーロー）復活

「変身っ！」

俺は叫びと共に突き出していた右腕を後ろに回し、左手を相手を殴るように突き出す。

ウォッチから光があふれ出し、俺の周りを包む。プレデターの戦闘員が危険を感じ俺に攻撃を仕掛けるがもう遅い。戦闘員が殴りかかったとき、すでに変身を終えていた。

現役時代は企業の支援があったからあった装甲も、武器も、今はない。あるのは戦闘補助のA Iとほんの少しの強化が施された己の肉体のみ。俺は黒い全身タイツのようなスーツを身にまといながら叫んだ

「正義のヒーロー　ただいま参上！　なんてね」

名乗りと同時に重心を下げ、戦闘員に突っ込む。戦闘員は大口を開けて俺を喰らおうとする。

俺はそいつの横に回りこみ右ストレートを喰らわせ、戦闘員を吹っ飛ばす。

「お前らの行動なんて予想済みなんだよ！」

こっちに気がついたようで襲ってきたもう一体のほうに殴りかかりながら吠える

「おるあ！」

もう一体も壁に埋め込む

「警報 後方より敵」

AIの声が響く あわてて後ろを振り返ると先ほど埋め込んだ戦闘員がこっちへ向かって走ってくる

今度は口をあけず俺に拳を向ける

「おるあ！」

俺は両手を使い戦闘員と組み合う

「警報 後方より敵」

「嘘だろ！？」

叫ぶと同時に後頭部に痛みが走った

それが俺の最期の記憶だった

消された記憶（メモリ）

「ん・・・。」

目が覚めたと言うことは分かった。　だけど手と足を伸ばそうとしたら『何か』に拘束されていた。　まるで小さい頃に見たヒーローのアニメでヒーローが改造されるシーンのようだ。

辛うじて少しだけ動く上半身を動かし、全身の見える部分のみ確認する。　見える限り服は全部取られているが身体にヘンな機械や怪しげなベルトが付いていたり、人間ではない何かの手が付いていたりすることは無い。　まさか改造される前か？　イヤな想像をしてしまつて冷や汗が垂れる。

「おっと目が覚めたようだね。　調子はどうだい？」

部屋の隅から声が聞こえた。　俺は急いで声の聞こえた方に顔を向ける。

「これがいいように見えるか？」

「ああ　拘束が邪魔だったね。　改造が失敗して理性が飛んだ時の保険みたいなものだったからね。　普通にやり取りで来て暴れてない所を見ると成功したっぽいね。」

男がしゃべり終えた後パチン　と指を鳴らした。　部屋の中に明かりが付き、両手両足の拘束が消える。　声のした方を見ると眼鏡をかけていて、殴ると折れてしまいそうなほど細い体をした男が白衣を着て立っていた。

「いつまでも裸だと見てるこっちも辛いから」

と言ってもう一つ持っていた白衣をこっちに投げる。それは他に
着るものがないのでそれにそでを通した。

「じゃあこっちから質問するね。君の名前と職業を言ってみてよ。」

「俺の名前は・・・」

ここまで言って違和感を覚える。名前が思い出せない？　そもそも
なんで俺はここに居る？　目が覚める前は？　そもそも『俺』は
『何』だ？

「その様子だと改造は成功したようだね。」

頭を抱えている俺をみて男は言った。

「とりあえず一般常識を除いた記憶を消去させてもらったよ。君
は『素材』はよかったんだけど余計な感情とかあったからね。」

男はそこまで言う一旦息を吸う。俺は固まったまま動けなかつ
た。

「今日から君は僕達の『組織』で生きてもらうよ。名前はそうだ
な・・・『ロウ』と名乗ればいい。君の戦い方は狼そのものだ
からね。」

男はニコニコしながらそういった。

「記憶をなくしたままっていうのも可哀想だからね。頑張れば記憶を少しずつ戻してあげるよ。君の仕事を簡単に説明しよう。僕達が指示する場所を破壊してくれればいい。あと、僕の事は『博士』とでも呼んでくれていいよ。僕も君と同じ記憶を消された人間だからね。」

博士とかいう人間が予想外のカミングアウトをした。しかし俺に動く気力はなかった。

消された記憶（メモリー）（後書き）

しばらくはこっちの方を更新しようと思います。
お願いします。 応援よろしくお

鎧をまとう男（ロウ）

「そんな君に早速『仕事』だよ。」

博士が俺に向かってそう言う。そして指を鳴らして上からスクリーンを降ろす。

「今回君はこの建物を壊してくれればいい。」

そこにはひとつの立派なビル。何階あるのか数えるのもめんどくさいくらいでかい。

「君一人にやつてもらおうわけではない。正確に言うと破壊作業の妨害に来る敵の排除・・・と言っても言った方が分かりやすいかな？」

確かに俺一人でビルを破壊するのは不可能だ。

「俺以外にどのくらいの数が来る？」

「破壊作業は別の部隊がやるから僕は知らないね。僕の部隊からは君と戦闘員を5人くらい出すよ。今回のリーダーは君だ。」

博士はそう言ったあと俺に向かって何かを放る。俺はそれを慌ててキャッチした。何かと思って確認したらそれは普通のデジタルウォッチだった。その時計を見た瞬間一瞬頭が痛くなった気がした。

「それはパッと見、普通の腕時計だがそれは『ウォッチ』と呼ばれる道具だ。君の武器であり鎧になる。右上の出っ張りを押した

後、『変身!』と言ってみてくれ。」

俺は『ウォッチ』の右上の出っ張りを押す。そして言われたとおりに叫んでみる。

「変身!」

叫びを合図にして腕時計から黒い糸のようなものが噴き出し全身を包む。1〜2秒後 俺の身体の周りには黒い全身タイツのようなものが付いていた。耳元で音声がかう告げた。

「マスター カクニン。 ナマエトセイベツヲイッテクダサイ。」

「言い忘れたけどAIの指示に従って。 君をそのウォッチのマスターとして登録するから。 登録が済んだら最適化されるからまた見た目変わるよ。」

俺は博士の言った通りに行動する。

「名前は『ロウ』 性別は男だ。」

「リョウカイ。 マスターロウ。 トウロクカンリョウ。 サイト
キカ カイシ。」

音と同時に再び糸が溢れ出した。 先ほどと違うところを上げるとしたら糸の色が銀色と言うところだ。

また1〜2秒したとき糸が収まる。 身体を見渡すとさっきの全身タイツのようなものの上から中世の騎士が付いていそうな胴当てとガントレット 足には膝から下を覆うように鎧が付けられていた。

俺が鎧を確認し終えると博士がこう言った。

「君に『ロウ』という名前を付けて正解だったよ。顔が狼みたいになったからね。」

博士はどこから取り出したかは分からないが全身が映りそうな鏡を置く。俺は顔を確認する。そこには狼の顔をして鎧をつけた男が立っていた。

「これが俺の鎧か。悪くないな。頼むぞ。相棒。」

「リョウカイ。コチラコソヨロシクオネガイシマス。マスター
ロウ。」

AIの声も楽しそうに聞こえた。

「鎧もできたことだし『仕事』の時間だね。僕に付いてきて。」

博士はそう言って歩き出した。俺はそのまま走ってついていった。

鎧をまとう男（ロウ）（後書き）

なんか納得いかない。自分に文才がないのが悔しいです。感想
や指摘がありましたらお願いします。

作戦開始（スタート）

「君はこれに乗って待機してもらおうよ。」

博士が指さしたところを見るとそこには真っ黒な大型のヘリが一台待機していた。

「詳しい事は中で説明するよ。」

博士が乗り込んだ後、俺もヘリに乗り込む。中を見ると黒い全身タイツのようなスーツを着た人間が5人いた。

俺が乗り込んだ後、扉が音を立てずに閉まる。

「さて、そろそろ行こっか。」

博士がそう言うのとフワリと身体が浮き上がる感覚がする。窓を見ると景色が動いていた。

「博士 これはヘリじゃないのか？ なんも音しないぞ？」

博士は一瞬いたずらが成功した子供みたいな顔で笑い、こう言った。

「これはね。この組織の強襲用ヘリコプター 通称 モスキート。音を一切たてず、姿を一切見せずに目的地上空へ突入し、降下させる。今回みたいな作戦に使われる機体だよ。僕が作ったんだ。」

「そんなことはとりあえず置いて作戦の説明をしよう。君た

ちはビルの崩壊と同時に降下。来た敵を迎撃してもらおう。それなりに戦ったら撤退の合図を出すからどっかの物陰で変身を解除して。変身する時に押したボタンを押して『解除』といえ解除されるから。ロウはとりあえず一旦変身を解除してこれを着て。」

博士は普通のサラリーマンが来ているようなスーツを俺に投げる。俺はボタンを押し、変身を解除する。

「解除。」

ウォッチに黒と銀の糸が吸い込まれていく。俺はさっきの白衣姿になった。

「この格好でいると多分捕まるな。」

「今更気が付いたのかい？　もうそろそろ作戦開始だ。さっさと着替えたらどう？」

俺はさっさと着替え出す。着替え終わつたと同時にブザーが鳴る。

「作戦場所に到着したみたいだね。　10秒後に降下するよ。」

「10、9、8、7、6、5」

カウントが進むと同時にドアが開く。風が中に入ってきて暴れ出す。黒いスーツの戦闘員は立ち上がり、開いたドアの前に立つ。真ん中のスペースが開いていたので俺もそこに進む。

「4、3、2、1」

カウントが進むにつれ足に力が入る。

「0！ 降下！！」

博士の声を合図に俺達は外に飛び出す。派手な爆発音が聞こえた。

俺はウォッチのスイッチを押し、叫ぶ。

「変身！」

先ほど戻った黒と銀の糸が俺を包む。再び『相棒』を身にまとう。

そして、地面に着陸する。ビルがいきなり崩れた事で人がパニックになっている。降りた時に1人踏んでしまったようで地面とは違った感覚がする。

「サクセン カイシ」

相棒の声が作戦開始を告げた。

作戦開始（スタート）（後書き）

うまく表現で来ている気がしない・・・
誰かアドバイスください。

敵との遭遇（エンカウント）

俺達全員着陸が完了する。この鎧にはレーダーのような機能があるらしく、俺らしい赤い丸がひとつと後ろに赤い丸が5個ある。後ろの丸は味方の戦闘員だろう。

「武装確認。全武装を教えてくれ。」

「リョウカイ。」

AIがそういうとリストが表示される。

両手にクローとワイヤーアンカー。腰の両サイドにはスモーク弾発射装置。弾は左右に3つずつ 計6個。これしかないのか。あとで博士に追加の武装を頼んでおかないとな。

俺が小さな決意をしたと同時にAIがこういう。

「ミカクニンブツタイ ゴタイセツキン。チュウイ。」

レーダーを見ると北の方からかなりのスピードで『何か』が接近してくるのがわかる。

「総員戦闘準備！」

俺はほぼ脊椎反射でそう叫ぶ。

「クロースタンバイ！」

「リョウカイ。クロースタンバイ。」

両方の手のひらから一メートルほどの熊手状の刃が飛び出す。クローが飛び出したのを確認した直後。『何か』が目の前に来た。赤、黄、青、ピンク、緑。そんな色をした全身タイツの5人組が現れる。赤色をしたやつが一步前に飛び出してこう叫んだ。

「そこまでだ。街をこわした罪。お前らの命で償ってもらおうぞ！」

赤色がそう叫んだことを合図に全員俺達に向かって走り出す。後ろに居た戦闘員も同時に走りだし、一人一体と組み合うことになった。俺はとりあえず後ろで様子を見る。一番先にやられそうな味方を援護するつもりだ。下手に突っ込むと五対六の乱戦になりややこしい事になるからだ。そうして傍観を決め込もうとしたとき、AIが最悪な事態を報告する。

「ミカクニンブツタイ。サラニモウイッタイ。セツキン。チユウイ。」

さらにもう一つ灰色の丸がリーダーに表示される。さっきの5つよりも速く接近してくる。五人の親玉か。拳に力が入る。

俺の目の前に5体と同じデザインの全身タイツのような装備をした金色のヤツが現れた。

「貴様がこいつらのリーダーか？俺は『セインツ』のリーダー。コードネーム『ゴールドセインツ』相手してもらおうぞ！」

金色のヤツ　ゴールドセインツとかいうヤツがどこからだしたのか

分からない金色の剣で俺に切りかかってくる。

俺はギリギリのタイミングでク剣をクローで受け止める。

「ただの雑魚ではなさそうだな。スピードを上げるぞ。」

言うと同時にバックステップで距離をとりそのあと再び突っ込んでくる。剣が当たると同時に動き、再び攻撃する。蚊みたいによこまかと動いてやりづらい。

とりあえず全ての攻撃を受け止める。『チャンス』が来るまで。

敵との遭遇（エンカウト）（後書き）

うまくかけてない気がする。 どう思いますか？

奮戦する狼（ロウ）

どのぐらい戦っていたかわからない。しばらくするとA Iが俺が期待していた報告をする。

「セントウイン イチメイ セントウフノウ。 テキ イツタイセツキン。」

このこう着状態が崩れる事。 本当ならこっちが1人倒すことがベストだが一体減ってしまった。 しかし十分だ。

「リーダー。 加勢します！」

緑色をした絶対リーダーにはなれそうもない雰囲気をした奴が合流する。 さてこっちも動くとするか。

「相棒！ スモーク射出！アンカー スタンバイ！」

「リョウカイ スモークシャシュツ。 アンカースタンバイ。」

A Iの復唱と同時に視界が白く染まる。 レーダーを頼りに一番近い仲間が戦っている敵の位置を予想する。 そしてそこにアンカーを打ちだす。

腕の下から先端にフックが付いたワイヤーが打ち出される。 それは目標に向かって真っすぐ飛んでいく。 直後、『目標』にささった手ごたえを感じる。

直後、ワイヤーを巻き戻す。 俺の身体は『目標』の方に向かって

飛んでいく。

煙幕が貼られていた場所から飛び出す。俺はワイヤーの先があるはずの部分を見る。『狙い通りの目標』に刺さっている事を確認する。

俺はそのままクローで『目標』を切り裂いた。

煙幕がはれ、金色の奴と緑色の奴が俺が立っているところを確認する。それと同時に2人は叫び声をあげた。

「ブルー！」

俺の足元で転がっている青い奴に向かってそう叫んだ。深く切り裂いたせいかすぐに戦闘に復帰できそうもない傷を負わせたようだ。出ている血の量を見ると早く医者に見せないとまずいかもしい。

俺は金色と緑の奴がパニックになっている隙に通信回線を開き近くの味方に『指示』を出した。味方は小さく「了解」と返事をする。さて作戦開始だ。

「お前らああああ！」

金色の奴が冷静さを失って突っ込んでくる。正直目で追うのがやっとなスピードだ。

俺と金色の奴の間に戦闘員が割り込む。俺はまだ下を見てぶつぶつ言っている緑色のやつに向かって照準を定める。そして再びアンカーを射出し、切り裂く。

「2人目！ 次はどいつだ！」

俺が雄たけびを上げる。 直後俺に通信が入る。 博士からだ。

「そろそろ撤収の時間だよ。」

「2体倒したんだぞ！？ もうすぐ全滅・・・」

俺の言葉を遮るようにA Iの報告が入る。

「ミカクニンブツタイ サラニカクニン。 ゴフンゴにホウイサレマス。」

「僕のセリフ取られちゃったね。 アンカーを上に出してくれ。 ヘリで回収する。」

通信がきれたとたん俺の視界が白く染まる。 だれかがスモーク弾を撃ったようだ。

俺は命令に逆らうわけにもいかず、レーダーに映ったヘリに向かってアンカーを打ちこんだ。

奮戦する狼（ロウ）（後書き）

最初の戦いにしては強引過ぎたかな？
ったいどのくらいなのだろうか？

ちょうどいい幕切れっていい

新武装そして休息（クールダウン）

俺のアンカーはヘリに刺さったようで乗り込んだ時、かなり不安定になっていた。

「やっぱりヘリで回収するもんじゃないね。別の撤収方法考えなくよ。」

と博士はいい、そのままパソコンのキーボードを叩き始める。

しばらくヘリの中はキーボードを叩く音と戦闘員のうめき声しか聞こえなかった。しばらくするとドアが開く。博士はキーボードを叩くことを辞め、扉から外に出る。俺もそれに付いていく。博士は俺が目覚めた部屋に入ると、机に向かい、しばらくキーボードを叩いていた。しばらくすると博士は立ち上がり、叫んだ。

「出来たああああ！」

さっきまでとは全然違う大きな声を上げる。反射的に耳をふさぎたくなるような大声で。

「一体何を作ったんだ？ 博士。」

俺は気になって聞いてみる。しかし博士は笑いながらこう言った。

「出来てからのお楽しみだよ。君の為になるものだから楽しみにしてよ。あとウォッチを貸して。さっきの戦闘中に完成した武器 インストールするから。」

ウォッチの中に武器のデータをインストールすると使用できるようになる。と昔誰かに聞いたような気がする。しかし闇雲にインストールするとすぐに保存領域メモリーがいっぱいになるらしい。だから良い武器をいかに少ない容量でダウンロード出来るようにするか
が技術部の腕の見せ所らしい。

博士はそんな作業を鼻歌交じりにやっている。正直知識だけある
せいかみていて不安になる。

また少しの間待っていると博士は今度は叫ばずに伸びをしながらつぶやく。

「やっと終わったー。正直元々戦闘員用に作った武器だけど使いこなせるよね？」

博士は挑戦的な顔で俺の方を見る。

「勿論。やってやるさ。その代わりもっと強力なヤツもたのむぜ？」

「戦闘員用とはいえ、今回のも強力な奴だよ？ その言葉後悔させてあげるよ。まあその前に今日はゆっくり休みな。ここの向かいの部屋だから。」

そう言って博士はウォッチとカードキーを投げる。

「別にウォッチでも開けられるけどカードキー使いたかったらそっち使って。」

「りょーかい」

俺は部屋から出て向かいの部屋へ歩く。そしてカードキーを当てるところにウォッチを当て、扉が開いたことを確認すると部屋に入る。部屋の中はクローゼットがひとつとベッド。そしてテレビが置いてあるだけの殺風景な部屋だった。

俺はそのままベッドに飛び込み、眠りに着いた。

新武装そして休息（クールダウン）（後書き）

昨日更新サボってすいませんでした。できるだけ毎日更新していきたいと思うので応援よろしく願います。

襲撃される組織（チーム）

部屋で寝ていたら突然警報音のようなものと「敵襲を確認。戦闘要員は至急第三ブロックへ集合せよ!」という放送が鳴り響いた。

俺は部屋に入ってそのままベッドに飛び込んだおかげで特に着替える必要もなくそのまま外に出ることが出来る。しかし俺は第三ブロックがどこにあるかわからない。俺はそのままドアを開け、博士の部屋へと向かう。目の前に在って移動が楽でいい。部屋に入ると博士は俺に向かってこう言う。

「ちょうどよかった。今呼びに行こうとしていたところだよ。

今放送で叫んでいるように敵の襲撃だ。数は現在確認されている限りでは15だ。今こっちに残っている戦闘可能なのは20だ。

数はこっちの方が有利だがあくまで戦闘の心得がある程度の人間だ。攻めてきているのはプロ。こっちの戦闘可能な人間の大半は最低でも戻ってくるのに一時間はかかる場所に出撃している。

君には援軍が来るまで耐えるか 可能なら殲滅してくれ。新武装のテストにはちょうどいいだろうからね。」

お願いするように言うが、ここでこの組織が壊滅したら俺の記憶の手掛かりがなくなることと、住む場所がなくなる。実質俺に拒否権はなかった。

「分かった。第三ブロックまでの場所を教えてくれ。」

「この部屋から出て右へまっすぐ言ったところで戦闘が起こっている。大至急行って欲しいな?」

「了解。 変身！」

俺はウォッチのスイッチを押し、『相棒』を身にまとう。

「ブソウデータ。 キチナイマップ。 インストールカクニン。
モニターニヒョウジシマス。」

AIの声と共に右の方には武器のデータ 左には基地の地図と思われるものが表示される。その地図を見て場所を確認する。 500メートルほど真つすぐ走ったところにあるらしい。 地図の所々は途切れている。 一体この基地はドンぐらい広いんだ？ どうでもいい想像を頭の隅っこに押し込む。 今は戦う時だ。

「リーダー範囲拡大。 どのぐらいまで行ける？」

「ハンケイサンビヤクメートルマデナラダイジヨウブデス。」

「了解。 限界まで拡大してくれ。 行くぞ『相棒』？」

「リョウカイ イキマシヨウ。 マイマスター。 キャクブスラストー テンカイトドウジニ サイダイシュツリヨクデ キドウシマス。」

俺は新武装の脚部スラスターが展開される前に部屋から飛び出す。

部屋から出たと同時に足に子供の頃見たロボットアニメのロボットの足のようなブースターが展開される。

「脚部スラスター イグニッション 点火！」

足元からキュイイイイ という音が聞こえる。 次の瞬間 爆音と共に俺の身体は前に吹き飛んで行った。

襲撃される組織（チーム）（後書き）

表現がザツクリしていると評価をもらいました。もう少し詳しく書けるように頑張ろうと思います。気が付いたことがあったらどんどんコメント下さい。

予想外の事故（トラブル）

直後、頭に強い衝撃を受ける。そして地面にたたきつけられる。その後もあちらこちらに身体をぶつけ、今自分がどこに居るのかすら分からなくなる。

「スラスター 停止！」

スラスターが止まる事でそのまま落下する。俺は痛む身体を抑えつつ通信回線を開く。

「博士！ こりゃどーなってるんだ！ 前に進むどころか同じところぐるぐるまわってただけじゃねえか！」

俺はぶつけたせいとか所々色が変わってたりヒビがはいっていたりする壁を見渡しながらこう言った。

「いやー ゴメンゴメン。まったくテストしてなかったからね。正直シミュレーションすら終わってないものだったからね。とりあえずいいデータが採れたよ ありがとう。」

正直殺意を覚えた。博士を後でボコボコにしてやろうと思い俺は第三ブロックへ走って行く頃にした。

500メートル走るのはさすがにきついかと思っていたが案外楽に行けた。昔の俺は陸上の選手でもしていたのだろうか。

そんなことは後だ。とりあえず今は目の前の事に集中だ。 集中。

目の前は広いスペースとなっており、コンテナのようなものが大量に置いてあった。ここは荷物の搬入口か何かだろう。近くには白衣姿でアサルトライフルを撃っている人が居たので話しかける。

「状況は？」

「敵はまだ一体も倒せていない！ 装備はアサルトライフルとグレネードだ。 戦闘員の半数は戦闘不能だ。 はやく援護行ってくれ！」

男は慌てながらそう言う。 事態は思ったよりもまずそうだ。

「クロー スタンバイ！」

「リョウカイ。 クロー スタンバイ」

新しい装備はさっきの脚部スラスターと腕に仕込まれたアームバルカン。 アームバルカンを使いたいところだがさっきのような事故があつては困る。 最悪腕が吹っ飛びかねない。 俺は今回もクローとアンカー、スモークで乗り切る事にした。

俺は5メートルほどの大きさのコンテナに飛び乗り上から攻める。

白い防弾着を付けたやつが居る。 レーダーでは灰色で表示されている。 どうやらこいつは敵らしい。

俺はコンテナからコンテナに飛び移りながら敵めがけて走って行く。 ばれないように音をたてないように気を付けながら。

俺は3つほどのコンテナの上を歩き、敵が真下に見えるところまでたどり着く。 相手はまだ俺に気が付いていないらしい。 これはチャンスだ。

そのまま飛び降り、敵の口を押さえ、背中をクロールで突き刺す。
そして勢いよく引き抜く。あと9体だ。

俺はそう思いながら再びコンテナに飛び乗った。

予想外の事故（トラブル）（後書き）

武器のアイデアが出ない・・・ もっと遠距離増やしていいのかな？

だんだん難産になって行ってそろそろルンフォのほうも更新しようかな？ と思っている俺でした。

罠を張る狼（ロウ）

「相棒。 敵の位置をレーダーに表示してくれ。」

俺は味方と障害物以外表示されていないレーダーをみてそう言った。

「ホウコク。 ネットゲンセンサー ハンノウナシ。 オソラク テ
キハ ダンネツシートノヨウナモノデ カラダヲオオツテイルモノ
トオモワレマス。 サキホドノヨウニ モクシシナイカギリ ホソ
クフノウデス。」

「了解。 目視すればいいんだな？」

俺はレーダーを頼りに下に降りる。 そして『もし俺が隠れると
したら』という場所に向かって走る。

コンテナの角を右に曲がる。 同時に射撃する音が聞こえた。 鎧
に何かが当たった感覚がしたが対していたくない。

「みいゝつけた」

俺は敵に恐怖を与えるようにホラー映画に出てくる奴のような声を
出し、撃たれた方向に突っ込んで行く。

「来るな！ 来るなあああ！！」

敵は3人いたらしく、うち一人は背中を向けて逃げ出し、後二人は
俺に向かってアサルトライフルを撃ちまくる。

当たってもちよつと痛い程度なので止まらずに走り続ける。そしてクロード2人の身体を切り裂く。死なない程度に抑えながら。しかし戦闘不能にするため片腕を切り落とす。

「うがああああ！」

「俺の腕がああああ！」

時々だれかが撃っている銃声に負けなくらいの大声を上げながら叫び、のたうちまわる。

落ちていたトランシーバーから声が聞こえた。

「化け物だ！ ライフルが効かない化け物が現れた！ 2人やられたぞ！」

化け物とは俺の事だろう。俺はトランシーバーの音声を送るボタンを押し、2人の悲鳴を聞かせる。しばらくの間聞かせたあとスITCHを離し、トランシーバーを持ってその場から逃げる。

この『餌』に食いついてくれるといいんだが・・・正直敵の装備を見る限りそこまで強いとは思えない。アサルトライフルが効かないならグレネードでも投げてその場から逃げだせばいいものをアサルトライフルをその場で乱射するなんてな。

「大丈夫か！」 「助けに来たぞ！」

さっき1人逃げた方から6人くらいがやってくる。これで指示してる人間を除けば壊滅だ。

予想以上のアホだ。

俺はその6人の命を刈り取るためにコンテナの上に飛び乗り、上から奇襲を仕掛ける。

あと少しで敵にクローを突き刺せる。そんな距離に来た時、あと少しで当たる敵がこう呟いた。

「かかったな？ 変身！」

敵と俺の間に見えない壁があるかのように俺の攻撃が強制的に止められる。そして敵が急に光りだす。

光が収まるとそこにはさっき戦った全身タイトの集団が立っていた。

「我ら『セインツ』 昨日のような不覚は取らん！ 覚悟しろ！
狼男め！」

目の前に立っていた金色の奴が同じく金ぴかな双剣を俺に向かって振るった。

罠にかかったのは俺の方か！ 俺は奥歯を強くかみしめた。

罾を張る狼（ロウ）（後書き）

お気に入り件数が5件を超え、PVも1000を超えました。
なんかすごくプレッシャーを感じる俺でした。
な

背を向ける狼（ロウ）

俺はそのまま斬られる訳にもいかずクローで受け止める。重い一撃だ。一瞬でも1000分の1でも力を抜くと斬られてしまいそうだ。

「くっ・・・」

「カクブカンセツ　ゲンカイフカ。　チュウイ。」

というAIの声と共に警報音がうるさく鳴り響く。腕の関節部分からは煙が上がっている。

「隙有り！　フリーフォールクラッシュ！」

という声と共に上から赤い奴が斧を振りかぶり無駄に高いところから落ちてくる。絶体絶命だ。こうなったらもうヤケクソだ。

「脚部スラスター　緊急展開！　展開と同時に最大出力で起動だ！」

「リョウカイ。」

AIは復唱せずに脚部スラスターを展開。そして起動する。再びさっきと同じように景色がちや混ぜになり、何がなんだか分からない。だがさっきと違い、何かにぶつかる感覚はあまりしない。遊園地の絶叫マシーンなんかよりひどく回っているのは事実だが。

「脚部スラスター停止！　停止と同時に地面へ着地するための姿勢

制御だ！」

「リョウカイ。 キャクブスラスター テイシ。 シセイセイギョ
カイシ。 スラスター シュツリョク ゴパーセントデ サイキド
ウ。」

声と同時にグルグル回っていた景色は収まり、普通に見えるようになった。そして今俺は倉庫の端の辺りの4メートルほどの高さを漂っていた。目の前にコンテナがあった時はよくぶつからなかったなと胸をなでおろす。そしてすぐにレーダーを確認する。さっき俺が居たところに灰色の点が6つ。敵は動いていないらしい。直線距離は100メートル。辺りにはコンテナだらけで奇襲するにはちよいどいい。どうやってぶちのめすかの作戦を考えていた時、博士から連絡が入る。

「ロウ。 命令変更だ。 現時点を持ってこの拠点を廃棄することに決めた。 出口にバイクが置いてあるからそれを使って速やかに脱出してくれ。 集合場所への地図は転送する。 あとこの拠点は5分後に爆発するから敵を倒してから逃げようなんて考えない事。じゃあ 次の拠点で待ってるよ。」

そういつて通信が切れる。せつかくいい作戦を考えたのに、何だかすこしもったいない気がした。

「キョテンジバクマデノ カウントダウンテンソウサレマシタ。
アト ヨンフンゴジュウビョウ。 サイタンダツシュツルートヲチ
ズニヒョウジシマス。」

俺の地図に赤いラインが引かれる。 敵からはちようど見えないように逃げる事になっている。 どうやら他の人間は脱出したらし

い。 さて俺達も脱出するのでしょうか。

俺は地図に従って走りだした。

背を向ける狼（ロウ）（後書き）

なんだかものすごい勢いでPVが伸びてる・・・学校から帰って確認して驚きました。あとどこでもいいことかもしれませんが、個人的に好きなアニメ『ベン・トー』の小説版 買っちゃいました。ちょうどいい事に一人称で書いてあるので参考にできたらいいなと思っています。明日辺り半額弁当求めてスーパーに行こうかと思っている俺でした。

逃げ出す狼（ロウ）

地図に従って走って行くと面白い具合に敵から隠れられていた。レーダーに映っている灰色の丸はドンドン奥の方に進んで行く。この様子だと基地ごと生き埋めになるのだろう。助けてやる義理もないので無視して走って行く。地図によるともう少しで外だ。

「キチ コントロールシステムニ アクセス カンリョウ。 ドア ロックカイジヨ。 ヒラキマス。」

目の前で壁のようになっていた物がどき、上に続く坂道が現れる。これを登れと言うことか。

坂を駆け上がる。 タイマーはあと30秒を示している。 バイクは坂道のすぐ近くに置いてあった。 真っ黒のバイクだ。 この基地の位置はよくわからないが人と会ったときこの格好はまずい。俺は変身を解き、ハンドルに引っ掛けてあったヘルメットをかぶり、すぐアクセルを入れる。 元から鍵がさしてあったようですぐにエンジンがかかる。

俺は2、3回ふかした後俺はそのまま真っすぐ全速力で逃げる。爆発の規模がどの程度か知らないが出来るだけ離れるに越したことはない。

その直後、大きな爆発音が後ろから聞こえた。 後ろをミラーで確認したらキノコ雲のようなものが上がっていた。 一体どのくらいの爆薬使ったんだよ！ 俺は今すぐ博士に突っ込みたかった。

俺は博士に通信をつなぐ。

「こちらロウ。 脱出完了だ。 だが変身を解除したせいで地図を見れない。 なんとかならないか？」

「やっぱり変身解除したか。 さすがにあんな恰好で外うろついたら職質は避けられないしね。 こんなこともあるうかとちゃんと準備しておいたよ。 ハンドルの中間地点にモニターあるでしょ？ それにウォッチをかざしてみてよ。 ちゃんと作れてたら情報送信できるから。 失敗したらまた通信してね。 別の方法考えるよ。 あとそのバイク。 戦闘員用の物を無理やり改造したから150キロ以上の速度出したら爆発するから速度に気を付けてね」

博士は爆弾発言と共に通信を切る。 いそいで速度を確認する。 針は140の辺りをもうすぐ超えそうところだった。 急いでアクセルから手を離し減速をする。 しばらくして落ち着いたら地図を確認しよう。 そう思い、俺は落ち着けるところを探すために真っすぐ走っていった。

??? 視点

どこかの山で小学生くらいの少女が1メートルくらいの高さの石に座っていた。 その後に少女を守るように2メートルくらいの男が立っていた。

「拠点。 無くなっちゃったんだってね。」

「はい。 先ほど集合場所の連絡が入りました。 お嬢様。」

男がそう言うと少女は石から飛び降りる。

「リンクス。 はやく集合同所行きましょ？　ここ　血のにおいが
ひどくてもう居たくないの。」

少女はそう言ってまわりを見渡した。　そこにはかなりの人数の人間が、全身血まみれになって倒れていた。

「このオモチャ　皆もろくて嫌になっちゃう。　次はもっと丈夫なオモチャだといいな。」

そう言って少女はスキップで山道を降り始めた。　その後をリンクスとよばれた男は黙ってついていった。

逃げ出す狼（ロウ）（後書き）

そろそろもう片方の方更新しようかなと思ったり、ロウの新しい武器を妄想しながら過ごしています。　ロウをチート使ってるんじゃない？と言われるくらいになるくらい強化して　さらに強い敵を出そうかな？　　思っている俺でした。

襲われる狼（ロウ）

時々道を間違えながら、なんとか2時間後に次の拠点にたどり着いた。地図に示された場所を見ても掘立小屋ひとつ見当たらない。まさか地図を見間違えたのか！？俺は不安になって博士と通信しようとした。そんな時後ろから声が聞こえた。

「あら？　こんなところに一般人がいるわ。　どうするべきだと思う？　リンクス。」

「機密保持の為に消すべきだと思います。　お嬢様。」

後ろからは少女と思われる声と40〜50代くらいの低い男の声が聞こえた。物騒な会話だと思う。直後、嫌な予感がする。同時にバイクのアクセルを全開にし、そこから逃れた。

「ちよろちよろ動かないでよ。　はずれちゃうじゃない。」

俺が居た方向から少女の声が聞こえる。後ろをミラーで確認したらゴスロリとよばれる服を着た少女は両手にナイフをもって俺の方に飛びかかってきた。

「問答無用ってか？　俺もタダで死んでやれるような人間じゃないんだよ！　変身！」

俺はウォッチのスイッチを押し、バイクから飛び降りる。右の方向に飛び出し、転がりながら体制を立て直す。

少女はバイクの上を通り過ぎて行き、そのまま木の方へ突っ込んで

行く。

「クロー スタンバイ！」

俺の叫びの直後、A Iが復唱し、腕にクローが展開される。

「いきなり攻撃しやがって！」

俺はそう言って少女の方に突っ込む。少女は勢い余って木にぶつかってしまったらしく、木の下で伸びている。

あと5メートルで届くと言うところで何かが割り込んでくる。

「お嬢様に指一本触れられると思うな。犬め。」

男はスーツの下にガントレットを仕込んでいたらしく、腕で俺の攻撃を受け止める。

「ぬううん！」

そのまま雄たけびを上げ、俺を吹き飛ばす。

「ありがと リンクス。 チャンス作ってくれて。」

スーツを着た男の方をけって少女が突っ込んでくる。

「バラバラになっちゃえ！」

少女はどこから出したのか130センチほどの傘を振りかぶって突っ込んでくる。アレに当たるのはまずい！

俺はそう思い、さっき少女がぶつかっただのは別の木を狙ってアンカーを撃ちこむ。幸いここは森なので木には困らない。

そしてそのまま枝から枝へ飛び移りながら逃げ出す。逃げながら通信を博士につないだ。

「博士！ 多分基地の目の前だと思う場所でゴスロリ女とスーツ着た男に襲われた！ どっか別の入り口はないか！」

「ん？ ゴスロリ女とスーツ着た男？ そのゴスロリの子 スーツ着た人をリンクスってよんでなかった？」

博士はあいかわらずの緩いしゃべり方で聞いてくる。たしかにそう言っていたはずだ。そのことを博士に伝えると博士の方から机を叩きながら爆笑する声が聞こえた。

「おい！ 何が面白いんだよ！ こっちは殺されかけてるんだぞ！」

「ああ ゴメンゴメン。その2人はウチの組織の者だよ。コードネーム オルトロス。強襲部隊のエースだ。すぐに伝えるからロウは元居た場所に戻って。リンクスはしっかり者だから何とかなるよ。あときつと変身してるだろうから変身は解かないでね。

変身後の特徴伝えとくから。」

博士はそう言って通信を切った。俺は恐る恐る 地図を頼りに最初に着いた場所へと戻って行った。

襲われる狼（ロウ）（後書き）

さて 新しい仲間出してみましたか。 自分で言うのもアレですが少女の方。 エースにしてはドジすぎますよね・・・
まあいつかと開き直りながら後書きを描いている俺でした

連れて行かれる狼（ロウ）

「あんた 新入りなら新入りですってさっさと言えばよかったのに。」

最初の場所に戻った時、かけられた第一声はそれだった。

「ロウって名前だっけ？ 私はジェミー。後ろの男は私の執事でリンクスっていうの。よろしくね。」

ゴスロリ女改めジェミーはそう言った後年相応の笑顔で右手を差し出す。俺はその手を強く握り返した。

リンクスは相変わらず、直立不動のまま俺を睨んでいた。まるでお前をまだ信用したわけではないと言いたそうな表情で。

「そのの三人 仲良くやってるのはいいけどそろそろゲート開けるよ。」

という博士の声が通信越しに聞こえる。その後地面から特に音を立てずに扉がせり出す。

「へえ。音出さずにドア出てくるんだな。てっきり俺は なんかゴゴゴ」とか言う音して、ごっつい扉でも出てくると思った。」

俺は感心しながら扉をくぐる。その先は下に続く階段になっていた。

「あんた 馬鹿？ そんな音出してたら簡単に見つかったちゃうでし

よ！」

とジェミーは言いながら俺の後頭部にとび蹴りをくらわせる。俺はバランスを崩し、石でできた階段を転がり落ちて行く。

しばらくしたら身体の回転が収まり、床にたたきつけられた。そしてその上のほうから博士の声が聞こえた。

「ロウ。お帰り。どう？ 家のエース。強かったでしょ？」

博士はまるで面白い劇を見た後の子供のようににはしゃいでいた。

「結構戦ったからね。ウォッチのメンテするから貸して。」

博士はそう言って右手を突き出す。俺は変身を解除しそのまま博士にウォッチを預ける。

「ありがと。しばらくの護身用に試作品預けとくよ。」

博士はそのままウォッチを黒く塗ったようなものを俺の左腕に巻き付ける。

「使わないに越したことはないけどいざって時は使ってね。君の鎧と武器はそのまま転送される『はず』だから。」

博士はそう言って走り去って行った。

「はずって。オイオイ。というか俺はいつたいどうしたらいいんだよ・・・」

いきなり初めて来た場所に置いていかれる。記憶がない事よりはマシなのだろうかかなり心細い。

「やることないんなら パーティーしましょ！ ロウの歓迎パーティーー！ うん決めた！ やろう！ リンクス。よろしく。」

いつの間にか後ろに来ていたジェミーは大きな声ではしゃぎながらそう言った。

「まずは他の人との顔合わせね。 食堂行きましょ。案内するわ。」

俺はジェミーに手をひかれ、奥の方へと進んで行った。

連れて行かれる狼（ロウ）（後書き）

すぐにもう片方の作品を追い抜きそうな速度でPVが伸びてきて驚いています。

気が付いたらお気に入り登録がひとつ消えていて少し悲しい俺でした。

称賛される狼（ロウ）

「お ジェミー よく帰ってきたな！」

「お帰り〜。ところで隣の奴誰？ カレシ？」

などと食堂に入った直後に大騒ぎになる。もともと大騒ぎしてたのかあちらこちらに酒と思われる空き瓶が転がっていた。

「なんだ。ロウの歓迎パーティー開こうと思ったらすでに祭りじゃない。どうしたの？」

ジェミーがそう問いかけると急に場が白ける。中には泣きだす者もいた。しばらくの沈黙の後、1人の男がジェミーに耳打ちをした。近くに居る俺にも聞こえる程度の声で。

「ジェミーさん、今日 第三支部が壊滅したでしょう。」

「ええ 知ってるわ。私も第三支部所属だもの。で？ ばか騒ぎするようなめでたい事じゃないでしょ？」

ジェミーが少し怒りながら問いだす。

「ジェミーさんは支部が壊滅したのは初めてで知らないかもしれませんがそこで死んだ仲間に対する手向けでさあ。ここに居るのは皆親友や親兄弟を失ったやつばかりでさあ・自棄になりたいのをこうして発散する。一種の伝統みたいなもんでさあ。」

ジェミーに耳打ちした男はそう言って手に持っていた瓶の中身を一

気に飲み干す。

「そんなのつまらないじゃない。 そんなあなた達の為にいい肴を持って来たわ。」

ジェミーはそう言った後深く息を吸う。

「ここに居るのは入ったばかりの新人なのに第三支部のケツ持ちをした男よ！」

と 大声で叫ぶ。

「ただ戦っただけじゃない。 一人一国の軍隊並みの力を持つセインツを相手に生き残り、最後には全滅させるっていう私でもすこし厳しいと思うことをやってのけたのよ？ こんなにすごい新人他に居ると思う？」

言い終わると同時にまず聞こえた音はカシャン。 というガラスが落ちて碎ける音。

直後に わああああ！ という歓声が沸いた。 そしてチビチビ飲んでいた人たちが騒ぎ出す。

「おい！ 今日は大宴会だ！ オフの奴全員呼び出せ！」

「酒ありったけ持って来い！」

「最高の祭にしてやるよ！」

「俺達のチームの未来に！ 乾杯！」

そこにいた人たちは思い思いの言葉をいって大騒ぎをしていた。
俺は1人、空気に取り残されていた。

「アンタ。 この世界はいつてまだ長くないからあんまり知らない
かもしれないけどアンタがつぶした『セインツ』って 1人でもあ
ったら死んだと思えて言われるくらい強い。 そんな人たちを
倒したと知ったら盛り上がるのも無理ないわ。」

そしてジェミーはそのあとこう言葉を続けた。

「ようこそ 自由を愛する組織 『クラウド』へ」

そのあと俺は人の波に巻き込まれていった。

称賛される狼（ロウ）（後書き）

最近 少し思うのですが、話しのテンポ もう少し早くするべきなのではないか？ このままいくべきなのではないか。 真剣に悩む俺でした。

飲み比べる狼（ロウ）

あのあと何時間たったのだろうか。いろいろな種類の酒を飲まされたり、人に囲まれたりという騒がしくも楽しい時間を過ごしていた。途中で誰かが、「クラウドの宴会といえこれだろ！」と叫んだあと、「全員参加！ 飲み比べ大会だ馬鹿野郎！ ここの酒全部空にしてやるよこん畜生！」 そういい、飲み比べをする事になった。

メイド服に身を包んだジェミーが「私 お酒は苦手だから配るところね。 リンクス。あなた絶対勝ちなさいよ！」

と言いながらカップに入った酒を配っていた。この部屋の中に何百人と人が居るのに配りきれなのだろうか。 と思った。

「全員に行きわたったな？ ルールは簡単だ！ 最後までぶっ倒れずに飲み続けたやつが優勝だ！ よーい！ スタアアアアト！」

最初に飲み比べをしようと言いだした男の合図と同時に、全員のみだした。

一杯、二杯という状態ならまだいい。配られる酒はランダムだ。味わって飲んでいるわけではないが、ワイン、ラム酒、焼酎。

全部バラバラだ。他に何が配られているか分かったもんじゃない。

近くではバタバタと人が倒れる音が聞こえる。一体どんなペースで飲んでいるんだ？

そう思い、次の酒を手にする。 飲んだ直後、喉が焼けるように痛

む。これはスピリタス!?

そう思った直後、俺は意識を手放した。

「ロゥウ。起きろゥ。」

と言いながら体をゆすられる。俺は痛む頭を押さえながら、起き上がった。

「やっと目が覚めたね。大丈夫？」

そう言って博士はコップを俺に渡す。

「その中にウコンの成分を溶かした者が入ってるからそれを飲みながら聞いてほしい。今すぐについてわけじゃないけど次の任務だ」

「次の任務？ 休みはないのか？」

俺は頭を押さえながら呟きに近い声で言う。

「誰も今すぐに出撃させようなんて思ってないよ。二日酔いの人間を戦場に放りだすほど僕も馬鹿じゃないからね。」

博士はそう言った後、スクリーンを降ろす。

「次に君に襲撃してもらう場所はここ。『セインツ』が所属する、いや今はしていったって言った方が正しいかな？ 組織の本部の襲撃だ。『セインツ』以外にもそれなりの強さを持つ敵はいるけど現時点で『セインツ』を超える敵の存在は確認されてない。安心と言えば安心かな？ この作戦はこの基地の戦力の三分の一 大体200人程度の投入が予定されている。そしてそれを二つのチームに分ける。『オルトロス』が大将を務めるAチーム。こっちのチームは敵本部の奇襲をする。そして君が所属するBチーム。大将はこの二番手 『大酒飲みのオロチ』 通称『オロチ』が担当する。そしてやってもらうことは単純だ。」

博士は眼鏡のずれをなおし、こういった。

「正面からの陽動。 可能ならそのまま踏みつぶしてもらおう。」

博士の眼鏡が怪しく光る。

「面白いじゃねえか。」

俺はそういって、拳を鳴らした。

飲み比べる狼（ロウ）（後書き）

最初にこれを書きながら思った事をひとつ。スピリタス飲んだ時の表現って喉が焼けるみたいな感じでいいのだろうかと思います。

作者はまだ未成年の為酒の感想は聞いた話と想像でしかありません。訂正できる人が居たら教えてほしいとおもう俺でした。

勇ましき大蛇（オロチ）

その後、博士に教えてもらった部屋に行き、そのまま布団に飛び込んで、眠る。

どのくらい眠ったのだろうか。俺は部屋の扉をノックする音で目が覚める。俺は眠い目をこすりながらドアを開ける。

ドアを開けると、そこに博士が居た。

「グッモーニング。ロウ。二日酔いは治ったかな？ 仕事の間だ。」

博士はそう言ってウォッチともうひとつ、十字架のネックレスを手渡した。首に巻く部分は鎖のようになっている。

「ウォッチのメンテナンス 何とか終わったよ。」

そう言った博士の顔はとても疲れたと言いたそうなでもどこか満足しているような表情で言った。俺は借りていたウォッチを返却し、自分のウォッチを左手首に巻く。

「ありがとうな。博士。ところでこのネックレスは？」

俺はネックレスを手を持ちながら問いかけた。

「『お守り』だよ。使わないことを祈ってるけどね。ボクは疲れたからもう寝るよ。あとはもう少ししたらくるオロチに聞いてね。じゃあ いい結果を待ってるよ。」

博士はそういつてフラフラと去って行った。それと入れ換わりになるように身長が2メートルを超えていて、上半身裸、筋骨隆々の坊主頭の男が俺に話しかけてきた。

「おめーがロウか？ 思ったよりちっこいんだな。」

大男はそういつてダッハツハと笑いながら俺の髪の毛をグシャグシヤとかき回す。

「俺は オロチ ここでナンバー2を面白おかしくやってる人間さ。さっさと作戦の場所行こうや。 トロトロしてたらおいしいところ全部持ってかれかねんからな。」

そういつてオロチはダッハツハと笑いながら歩いていった。俺は付いていく前に呼び止め、こう問いかける。

「オロチ！ 作戦とかの打ち合わせはないのか？」

オロチは止まって、こちらを不思議そうに振り向く。

「何を寝ぼけたことを言っている。 全員そろい次第、敵の本拠地に突撃する。 それ以上のことが必要か！」

だんだん声を大きくしながら叫ぶ。

「否！ 所詮、策というものは圧倒的な力の前には無力なものだ！ 卑劣な罠があったら踏みつぶしていけばいいのだよ！ さあ行こう！ おもしろき戦場へ！」

そう言っただッハツハと笑いながら歩いていく。俺はかなり不安

になりながらもその大きな背中を追っかけて行った。

ゲートに着いた時、10tトラックが5台ほど並んでいる横に俺のバイクがあり、俺はそれにまたがる。

オロチは先頭のトラックの運転席の上に飛び乗り、オロチはこう叫ぶ。

「勇ましき戦士達よ！ さあ行こう！ 血と肉の祭典へと！ われらは囷らしいがそんな小さき事を気にするな！ 本体が到着する前にたたきつぶしてやろうぞ！」

オロチがそう叫ぶと同時に荷台のほうからオオオオ！ という声が聞こえる。 どうやら荷台に兵士が乗っているようだ。

「いざ！ 出陣！」

オロチの合図と同時にシャッターが開き、トラックが進み出す。俺はアクセルをひねり、一番後ろのトラックの後ろを追いかけた。

勇ましき大蛇（オロチ）（後書き）

オロチのセリフがどうしても無能な指揮官の言葉になってる気がする・・・

どうしたらカッコイイセリフをかけるのか真剣に悩んでいる俺でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4844t/>

俺、元ヒーローっす。

2011年12月1日23時49分発行